

## 第3章 室蘭市内案内

### 1.景勝地

室蘭八景（昭和45年(1970)に市民投票などにより選定）

- ・室蘭港の夜景（24ページ参照）
- ・地球岬の絶景（20ページ参照）
- ・測量山の展望（19ページ参照）
- ・絵鞆岬の景観（同ページ参照）
- ・金屏風、銀屏風の断崖絶壁（20ページ参照）
- ・黒百合咲く大黒島（同ページ参照）
- ・マスイチ浜の外海展望（同ページ参照）
- ・トッカリシヨの奇勝（20ページ参照）

絵鞆岬（室蘭駅から5.0km）

絵鞆半島の先端にあるこの岬は、噴火湾を中心として昭和山や有珠山、羊蹄山などが眺望できる代表的な景観地として室蘭八景の一つになっています。また、絵鞆の地名は、語源となるアイヌ語の「エンルム」（岬）から転化したものです。（展望台...26ページ参照）

マスイチ浜（室蘭駅から6.2km）

語源はアイヌ語で「マス・チセ」（ウミネコの家）といい、ウミネコの巣が多かったことからこのような名がついています。付近には、ローソク岩や仲よく並んだカモメ岩、通称“象岩”と呼ばれるゾウが寝そべった形そっくりの岩があり、また、噴火湾を隔てた駒ヶ岳などの眺望はパノラマを見るようで、室蘭八景の一つになっています。



昭和34年(1959)には、この浜からアイヌの人たちの遺跡が発見され、この入江を舞台におおらかな狩猟生活を送っていたのがうかがい知れます。（名勝ピリカノカ絵鞆半島外海岸...35ページ参照）

大黒島（絵鞆岬から海上約1km）

アイヌ語ではボロモシリ(親である島)といい、室蘭港の入り口に浮かぶ、周囲約700m、標高35m、面積2.4haの小さな島です（公共渡し船はありません）。



天保9年(1837)から7年間、この地域の場所請負人をしていた岡田半兵衛が、安全祈願のため島内に大黒天を祭ったことから「大黒島」と呼ばれました。

昭和30年室蘭ロータリークラブによって、島の頂上にハンス・オルソンの慰霊碑が建立されました。平成8年(1996)に室蘭ルネッサンスによってプロビデンス号来航二百年祭が開催され、英国大使サー・デビット・ライト夫妻が招かれ、この慰霊碑に献花しました。（ハンス・オルソンの慰霊碑、プロビデンス来航記念日碑...37ページ）

海事関係者の間では、「オルソン島」の名で、世界的に知られています。（プロビデンス号の来航...9ページ、ハンス・オルソンの慰霊碑...37ページ参照）

#### mini情報 大黒島と黒ユリ

寛政8年(1796)英国船プロビデンス号が来航し、このとき倒木により事故死したデンマーク人水兵ハンス・オルソンがこの島に葬られたところから、島には黒百合が咲き始めたという伝説があります。

昭和45年(1970)制定の「室蘭八景」でも“黒百合咲く大黒島”というキャッチフレーズが付いており、昔は黒百合が多かったようです。しかし、心ない乱獲者のせいなどで幻の花となりかけましたが、平成11年(1999)から市民の手によって植栽が続けられています。

### 旧室蘭灯台 (大黒島)

明治24年(1891)4月に建設され、同年11月1日に初点灯した道内17番目の灯台です。同37年(1904)4月1日に霧信号所が併設されてから、昭和52年(1977)までの長い年月、室蘭港の道しるべとして航海の安全を守ってきました。

昭和49年(1974)11月、外防波堤に新しく灯台が設置されたため、大黒島の灯台は消灯しました。同53年(1978)7月には霧信号所も廃止されたので、同年8月から市が大黒島の管理委託を受けています。

灯台は、初点灯日を設置年月日とし、順番はそれによるものです。(室蘭海上保安部による)

### 白鳥大橋

昭和30年(1955)に、時の北海道開発局室蘭開発建設部長が、港をひとまたぎする大橋を提唱しました。当時は、夢の大橋とさえいわれたこの橋ですが、室蘭地域の経済の成長に伴い、その必要性が強く叫ばれ、官民一体の運動が実を結び、同56年に事業化が決定、同60年に工事が着工、平成10年(1998)6月13日に開通しました。

橋は全長1,380m、中央径間が720mあり、日本で10番目、東日本では最大の吊り橋です。本市の交通体系の確立、港湾機能の充実、流通の合理化のほか、地域開発が促進されるなど本市をはじめ、広域的にも非常に大きな意義を持つものです。通行料は暫定無料。また、日本で初めて、風力発電を利用して、橋にライトアップとイルミネーションが施されました。

橋のもとには、これまでの工事の歩みや貴重な資料などを展示する「白鳥大橋記念館」が建てられ、観光客でにぎわい、道の駅としても利用されています。(道の駅「みたら室蘭」...65ページ参照)  
「概要」 路線名：一般国道37号 種別：第1種第3級(設計速度60km/h)2車線

### 白鳥大橋ビューポイント(4カ所、市が進める「橋のまち顔づくり事業」で選定)

- ・祝津公園展望台(祝津町)・・・ 広い展望台から白鳥大橋を眺める人気のスポット。日中は、大黒島や絵鞆臨海公園、マリーナなどを一望できる。
- ・潮見公園展望台(みゆき町)・・・ イタンキ浜を望む高台から白鳥大橋を望む展望台。「鉄のまち室蘭」を象徴する新日鐵住金(株)室蘭製鐵所の工場群と、その手前に住宅と商店が立ち並び輪西町の街並みも一望できる。
- ・八丁平展望台(八丁平)・・・ 住宅街の片隅にあり、白鳥大橋を真横から眺める小さな展望台
- ・白鳥湾展望台(崎守町)・・・ 白鳥大橋と工場群が美しいコラボレーションを見せる展望台

### mini情報 ほかにもある白鳥大橋ビューポイント

市で選定した以外のポイント

- ・測量山展望台(清水町) ... 晴れて空気が澄んでいる日中は、大橋と工場群の向こうに昭和新山と羊蹄山が重なる
- ・白鳥大橋展望台(祝津町) ... 橋を最も間近で、眺めることができる展望スペース

隠れたビューポイント

- ・鍋島山(函館どつく前の山)の山頂 ... みなと小学校グラウンドの上から登るのが最良だが、険しい道
- ・望洋台霊園から白鳥台方面への道道 ... 絵鞆半島全景と室蘭市全体が見渡せ、室蘭市が馬蹄型に見える道

### 内浦湾(噴火湾)

寛政8年(1796)、英国船プロビデンス号が内浦湾に来航したとき、駒ヶ岳や有珠山、樽前山などが盛んに噴煙をあげているのを見て、同船のプロトン船長が「ボルケイノ・ベイ」(噴火湾)と命名してヨーロッパ諸国に紹介したので、この名が有名になりました。

駒ヶ岳の噴火	1640年		1856年		1920年				
有珠山の噴火	1663年	噴火年不詳	1769年	1822年	1853年	1910年	1944年	1977年	2000年
樽前山の噴火	1667年	1739年	1804年	1874年	1909年				

## 測量山（室蘭駅から4.0km）

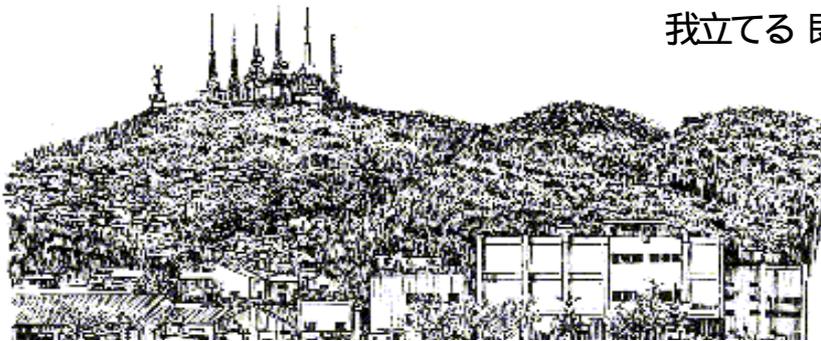
測量山は標高199.6mと、あまり高い山ではありませんが、明治5年(1872)、札幌本道造るときに、当時、陸地測量兼道路建築長の米国人ワーフィールドが、この山に登り道路計画などの見当を付けたことから「見当山」と呼ばれていたのを、後に「測量山」と改めました。アイヌ語ではホシケサンペ〔先に出てくる者〕といい、半島側で一番高い山で目印にされていたことが分かります。測量山を含む周辺一帯は、都市計画“測量山緑地”として市民に親しまれ、また、野鳥の宝庫としても知られています。

面積は119.5haあり、緑地内には植物が約500種、動物は野鳥類のほか、昆虫類が豊富で青少年の自然観察の場となっています。市街地の近くに、このような緑地が保存されているところは、全国でもあまり多くありませんので、今後とも自然環境の保全に努めなければならない地域です。

山頂の展望台のほか、唐松平には野外ステージ、さわやかトイレなどが周辺の自然にマッチするように整備されています。(さわやかトイレ...60・61ページ参照)

山頂展望台からの360度は大パノラマで、昭和6年6月この地を訪れた歌人、与謝野鉄幹(1873-1935)・晶子(1878-1942)夫妻は、来蘭した翌日、この山に登り次のように歌っています。

(この時の天候は霧で、室蘭では二人で13首詠んだそうです)



我立てる 即涼山の頂の  
草のみ青き 霧の上かな  
鉄幹  
灯台の  
霧笛ひびきて  
淋しけれ  
即涼山の  
木の下路  
晶子

## 測量山鉄塔ライトアップ

昭和63年(1988年)の港まつり期間中に、北海道電力(株)が測量山山頂のテレビ塔6基のライトアップを試験的に実施したところ、希望の灯として継続を望む市民の声が高まり、市民団体「室蘭ルネッサンス」の運営により、同年11月28日から継続されています。

平成6年(1994)4月26日には、民放局の中継塔が1基加わって7基のライトアップとなり、灯し続けて20年目に当たる同20年(2008)1月27日に連続点灯7,000日、そして、同28年(2016)4月14日には、ついに連続点灯1万日を迎えました。

個人の記念日などに点灯を申し込み、灯された明かりは、室蘭市民の心のシンボルとして親しまれています。それぞれの思いが託された毎夜輝く光の柱は、室蘭夜景に彩りを添え、今なお灯され続けています。(室蘭夜景...24ページ参照)

### 申込方法

点灯希望日までに、一回(日没から午前0時まで、冬季10月から翌年3月は午後11時まで)4,000円(電気料や維持管理費など)と簡単なメッセージを添えて下記に申し込み。

メッセージは、新聞には毎週火曜日朝刊(当日火~金曜日分)と土曜日朝刊(当日土~翌週月曜日分)に掲載。コミュニティ放送「FMびゅう」でも月曜から金曜まで、17時からの番組内で紹介しています。また、点灯日にホームページでメッセージを表示しています。

### 申込先

(一般財団法人)室蘭ルネッサンス事務局  
(10時~16時)

〒051-0011 室蘭市中央町2-8-10

電話・FAX 0143 23 6600

定休日 土・日曜日

ホームページ <http://muroran-renaissance.or.jp/>

### チキウ岬 (母恋駅から3km)

語源の「ポロ・チケップ」(親である断崖)が、チケウエチキウ チキウと転化して岬の名前となり、名称などには「地球」という当て字が使われました。いつから、だれが、この字を使い始めたのかははっきりしていません。

昭和60年(1985)の21世紀に残したい「北海道の自然100選」(朝日新聞ほか2団体)、同61年の「あなたが選ぶ北海道景勝地」(北海道郵政局)、同62年の全国規模で実施された「新日本観光地百選



ヤングカップル部門」(読売新聞)で、それぞれ第1位になりました。

ここには地球岬展望台(27ページ参照)が整備され、快晴の日には遠く恵山岬や下北半島を眺望でき、元旦には大勢の人々が海に昇る初日の出をみようとする足運びます。

平成24年1月に、名勝ピリカノカ絵鞆半島外海岸に指定されました。

### チキウ岬灯台 (同岬の突端、金屏風から0.7km)

大正9年(1920)4月1日に点灯されたチキウ岬灯台は、海拔130mの断崖の上であり、59万カンデラの光は、海上24海里(約44km)の遠方まで届き、沿岸を航行する船舶の目標として重要な役割を果たしています。平成3年4月に完全自動化になり、翌年無線方位信号所を廃止しました。平成10年には「日本の灯台50選」にも選ばれました。

毎年、「海の日」の祝日などに、一般公開されています。

**mini情報** 一般的に灯台は冬の雪と判別するため、外壁には赤や黒の色が混じっており、チキウ岬灯台のような全体が白色の灯台は珍しい。上から見下ろせる灯台や、下部が八角形の灯台も珍しい。

### 地球岬散策路 (地球岬～ユースホテル)

地球岬からイタンキ浜の上にあるユースホテルまでの約4kmの散策路で、観光道路からは見ることができない景観が、次から次と展開され、本当にここが東北以北最大の工業都市室蘭かと思わせます。背の低いササの中に、けもの道があり、片側には工場群と市街地、片側は広がる草原と100m前後の断崖絶壁が続く、夏にはエゾカンゾウなど各種の花が咲きます。

### 金屏風 (地球岬から0.7km)

地球岬とトッカリシヨの間にあるこの一帯は、約100mの直立した断崖が連なり、赤褐色を帯びた崖面に朝日が映えると、あたかも金の屏風を立て連ねたように見えることからこの名で呼ばれるようになりました。銀屏風と一対で室蘭八景の一つとなっています。

### 銀屏風 (絵鞆岬から0.5km)

アイヌ語でチヌイエピラ(彫刻のある崖)といわれており、ハルカラモイと恵比須島の中の崖面一帯をいい、この崖に夕日が映えて銀色に輝くところから、この名で呼ばれるようになりました。トッカリシヨ側にある金屏風と一対で室蘭八景の一つになっています。

### トッカリシヨ (金屏風から0.6km)

語源はアイヌ語の「トゥカル・イシヨ」(アザラシの岩)で、金屏風とイタンキ浜の間にありません。緑のベルトと奇岩で峻なす絶壁の荒々しい景観と、イタンキ浜を左手に見ての海原の静寂さが奇妙な対照をつくり、本市を代表する景勝地として室蘭八景の一つに、また、平成24年1月には、名勝ピリカノカ絵鞆半島外海岸に指定されました。ここには、トッカリシヨの伝説が残っています。(名勝ピリカノカ絵鞆半島外海岸...35ページ、トッカリシヨの伝説...86ページ参照)

トキカラモイ（緑町、白川米穀店向かい付近、室蘭駅から1.5km）

明治5年、ここに木造の仮棧橋が造られたのが、室蘭港の開港でした。

語源はアイヌ語の「トキカル・モイ」（チカの多い入江）で、現在の海岸町3丁目付近がまだ海だった時代、この入江にはチカがたくさん生息していたので、このような名が付いていました。

ハルカラモイ（室蘭駅から6.2km）

測量山観光コースにあるこの地域は、銀屏風と一連の断崖になっています。ハルカラモイの語源はアイヌ語の「ハル・カル・モイ」（食料を採る入江）で、魚が多い入江の意味です。平成24年1月に、名勝ピリカノカ絵鞆半島外海岸に指定されました。

・アフルパロ（ハルカラモイ付近）

銀屏風からハルカラモイにかけての海岸線は起伏に富み、そそり立つ崖が壮大な自然美を造っていますが、その崖の中腹にはいくつもの洞窟が不気味に口を開いています。

アフルパロとはアイヌ語で「入道の口」という意味で、一度足を踏み入れたら二度と帰れないあの世への道だったのでしょう。誰も知らない室蘭のアフルパロをあなたも探してみませんか。

チャラツナイと蓬萊門<sup>ほうらいもん</sup>（母恋駅から3.3km）

語源はアイヌ語の「チャラシナイ」（滝をなしてサラサラ流れ下る小川）で、山手町から地球岬までの海岸沿いの中間にあります。

この海岸付近には、大小いくつもの奇岩が点在し、室蘭の外海の中でも一風変わった、神秘的な景観を醸し出しています。一番大きい岩は、ムカルソ（アイヌ語で、オノ、マサカリの意）と呼ばれ、満潮時には小舟が通れるほどの空洞（陸からは見えません）があることから、和人は「窓岩」と呼んでいましたが、東向きに穴が開いていることから、蓬萊山（中国の伝説で、東海中にあり、仙人が住み、不老不死の地とされる霊山）に通じる道ということで、この名が付きました。

ここには、天地創造の神オキクルミが、室蘭半島を造ったときに使った道具類を捨てたというアイヌの人たちの伝説が残っています。

イタンキ浜（東室蘭駅から2.5km）

語源はアイヌ語の「イタンキ」（椀）。昔、飢饉に遭った日高地方のアイヌの人たちが絵鞆に食料を求めて来る途中、フンペシュマ（鯨岩：蘭東下水処理場前の海の波間に見え隠れする岩）をクジラと思い、クジラが岸に流れ着くのを寒さに耐えながら待つうち、薪が尽きてしまい、最後に残った自分のお椀まで燃やしてしまいました。岩が寄ってくるわけもなく、ついには、全員が餓死してしまったという悲しい伝説（イタンキ浜の伝説...86ページ参照）から、この地名で呼ばれるようになったといわれています。また、平成5年（1993）、この辺りで、ツメタガイという巻き貝が産卵のために砂で作るお椀状のものが、たくさん見つかりました。これをアイヌ語で「ヲタ・イタンキ」といったことから、この地名が付いたのでは、という新説も生まれ、今のところ、どちらが本当の由来か定かではありません。

・鳴<sup>なり</sup>砂<sup>すな</sup>（イタンキ浜）

アイヌの人たちがつけた地名「ハワノタ」（声ある砂浜）が元となり、イタンキ浜一帯の砂浜を昭和61年（1986）に調査したところ、日本でも有数の“鳴砂”であることが実証されました。

“鳴砂”とは、砂同士の摩擦で、「キュッキュッ」と澄んだ音がするもので、

その条件は、砂に長石やガラスの材料となる石英の粒が多い

石英の粒に丸みと艶がある

砂の中に含まれる石英の粒が適度の大きさでそろっている

さらに、最も大事なことは、油やゴミなどで汚染されていないきれいな砂であることです。

イタンキ浜は、浜全体が“鳴砂”海岸ですが、汚れなどで自然の状態で音が出る場所はかなり限定されています。なかでも、トッカリシヨ側の白っぽく乾いた砂の条件が良いようです。

音の出し方は、足で強く擦るように歩くか、手で強く擦ると良いでしょう。また、ワイングラスなど、底の丸いグラスに砂を入れ、棒などで突くと可愛い音を出します。

鳴砂は、石英(ガラスの材料となる鉱物)の粒によって鳴ります。石英の粒は十分に洗浄されると、表面の摩擦が極端に大きくなります。それをこすったり踏んだりして砂に大きな力がかかると砂が動き、砂同士が擦れ合って音を出します。これは新雪などを踏んだ時に「ギュッギュツ」と鳴る音と同じ現象です。イタンキ浜のように都市の中に有る鳴砂は非常に珍しく、さらに大きな工場や市街と隣接している海岸に鳴砂があるのは、ここだけです。

ほかの地域の鳴砂は、石英が50～80%(一般的に石英が多いほど鳴りやすいとされている)含まれていますが、イタンキ浜の鳴砂には石英が7%しか含んでいないにもかかわらず、砂が鳴るのです。さらにほかの鳴砂より石英の粒が小さく、高い音(音階は「シ」)で鳴ります。また、「高温石英」という生まれたての石英(火山活動中の溶岩が空中に飛び散ったときに急に冷えて固まったもの)で、別名「天使の涙」と呼ばれるものが含まれているのも特徴です。このほかにもイタンキ浜の砂には、大量の砂鉄が含まれていますが、鳴砂が有るところでは、砂鉄はとても重いので地中に沈み、石英は軽いので地表を覆っています。また、石英の粒は、風や波の動きで常に移動し、トッカリシヨ側の特定の場所に集まりやすいようです。環境に左右されて鳴らなくなることがある鳴砂は、「環境のバロメーター」といわれています。

平成9年3月に市民団体「イタンキ浜鳴り砂を守る会」が発足し、砂浜の清掃など保護活動を行っています。

・すこやかロード 鳴砂の浜コース

イタンキ浜付近から潮見公園を往復するコースです。負荷をかけたいときは、鳴砂海岸からイタンキ浜に戻り潮見公園へ向かうこともできるので、目的に合わせたウォーキングが可能です。高台からは港や工場群、太平洋と一緒に眺めることができ、ハマナスなどの花々、磯の香り、鳴砂の音、潮風を満喫しながら、アップダウンのあるコースを歩くことができます。

・ビオトープ・イタンキ

イタンキ浜に隣接する、みゆき町の潮見公園内で、「失われた湿地を復元し、子どもたちが生き物と触れ合える場を作ろう」と自然保護と再生を目指し、平成18年から5年間かけて、市民の手によるビオトープの造成が、行われてきました。湿地の復元は順調に進み、池に放した室蘭在来の淡水魚トミヨが順調に繁殖し、これを狙って、近頃、室蘭で見かけることもなかったカワセミが姿を見せるようになりました。

室蘭には至る所にいたと言われるホタルの復活も目標で、平成18・19年に、近隣の虎杖浜地区の野生のヘイケボタルの幼虫を放流し、順調に繁殖、今では、全てがイタンキ生まれとなりました。ビオトープは「失われた室蘭の湿原」をモデルにしているため、もともと室蘭にいない種類の魚やカメなどの生き物の放流はしていません。

平成23年5月の造成工事完了を機に、これまで活動を行ってきた「NPO法人ビオトープ・イタンキin室蘭」から市に寄贈され、彼らの思いと復元された自然が、後世へと引き継がれていくよう、ビオトープ憲章が制定されました。

室蘭市ビオトープ憲章(平成23年8月1日制定)

ビオトープ・イタンキが、未来を担う子どもたちによって、ふるさと室蘭の自然を学ぶ場として活用され、また、自然を愛する市民によって、後世に未永く引き継がれることを願い、ここに室蘭市ビオトープ憲章を制定します。

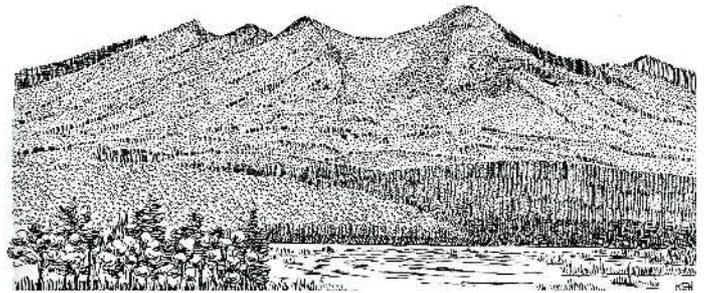
1. ビオトープ・イタンキは、「獲物のあるビオトープ」として、子どもたちがじかに生き物に触れ、体感し、自然の恵みや命の大切さ、ふるさとの自然と環境について学ぶ場です。
2. ビオトープ・イタンキは、かつて私たちの身近にあって、今は失われた「室蘭の湿原」をモデルとして、自然再生を図る場です。
3. ビオトープ・イタンキは、室蘭市の公園として、市民と行政の協働によって、大切に維持・管理されます。

ビオトープとは、直訳すると「生き物 島・楽園」。もともと生物学の用語ですが、再生された自然を意味する言葉として一般化しました。

### 室蘭岳（正式名称：鷲別岳、標高911m）

室蘭で一番高い室蘭岳への登山は、中腹(450m)にある白鳥ヒュッテ（市営、30人収容）が起点となります。また、標高911mにちなみ、9月11日を室蘭岳の日と定めています。（白鳥ヒュッテ...76ページ参照）

ヒュッテから少し登ると水神社があり、夏場はさらに坂を登ってガンバリ岩で左折します。尾根上になだらかな一本道が続き、ダケカンバの林を抜けると頂上は間近です。



頂上へは、もう一本、ヒュッテの水飲み場からペトル川に下りる新道「西尾根コース」があります。始めは、深い林の中の小道をたどりますが、そこを抜けるとジグザグの急な坂になり、この辺りからは室蘭岳が三角形の端正な形を見せ、特に美しく見えます。

山頂の看板は昭和63年(1988)に室蘭ロッククライミングクラブと市民団体「室蘭岳に看板を立てる会」により、室蘭営林署の許可を得て、同年10月にカツラ材の一枚板(180cm×75cm)で設置しました。

経年の風雨により一部欠けるなどで傷みが進んでいましたが、補修を北海道山岳連盟に相談された室蘭民報社により、平成27年(2015)の創刊70周年を記念し地域貢献事業の一環として補修作業が行われ、同年8月にリニューアルされました。

ここからは、噴火湾を一望出来るほか、駒ヶ岳、羊蹄山の山並み、洞爺湖も眺望できます。また、昔アイヌの人たちが山腹にニシンの形の残雪(雪形)が現れると、ニシン漁に出たことから、この山をヘロキ・ウパシ(ニシン雪)山とも呼んでいたそうです。(図書館でまとめた伝説に『春を告げる室蘭岳のニシンの雪形』のお話があります。89ページ参照)

山麓には、道内一の太さともいわれるミズナラの大木があります。幹回りが7.29mもあり、樹齢は推定で数百年、樹木の高さは約35mです。

#### ・水神社

昭和30年(1955)、室蘭市が室蘭岳夏道コース5合目付近のペトル川支流の湧水口に「室蘭市民の生活水となる室蘭岳を水源とする湾録の取水口の湧水や事故防止」を祈願して建立した水神社が、平成2年(1990)冬の雪崩により崩壊。その後、鳥居とともに市によって撤去され、政教分離の原則に基づき、再建は見送られました。

平成6年(1994)、室蘭ハイキングクラブが中心となって「水神社再建準備会」(のちに「水神社保存会」となる)を発足。3年かけて本殿、鳥居が再建されました。

社には、日本最古と言われる奈良県吉野の丹生川上神社のお札(昭和16年(1941)にもらい受け、チマイベツ浄水場内に祀ったお札)が納められています。

#### ・白鳥の鐘

頂上には、昭和53年(1978)室蘭ハイキングクラブ会員・茶道方円流総師範の千葉和子さんが設置した白鳥の鐘があります。設置から35年以上経過していますが、同クラブの会員らによって毎年手入れされ、今なお、心地よい音色を保ち続けています。

#### 保存林・樹木

5月中旬、樹齢およそ210年、樹高約16m、幹周り4.3m、おそらく桜では室蘭一の大木と思われるエゾヤマザクラが花を咲かせると、新しい山が誕生したような気がします。

このサクラは、幌萌町70番地にあり、昭和53年3月、室蘭市の保存樹木に指定されました。(桜の名所・花の名所...32ページ参照)

室蘭市には、このほか、高砂町(3-12-1)のシンジュ(屯田兵入植記念保存樹木)の2本が指定されています。また、保存樹林としては、現在市内で9カ所が指定され、本輪西3丁目から5丁目にかけて集中しており、ほとんどは開拓の先祖がさまざまな思いを込めて植えたものです。